

イラン地震災害派遣 消防救助隊の活動記録

〈カラーグラビア参照〉

消防庁国際消防
救助隊総括官

小林 恭一

はじめに

去る六月二十一日五時五十七分頃発生したイラン北西部を震源とする地震は、時が経つに連れて急激にその被害の大きさが明らかになり、イラン国政府から各国に対して救援要請が出されるところとなった。

日本政府も、イラン国政府からの要請に応じて「国際緊急援助隊」を派遣することとなり、消防庁に対しても二十二日未明に、外務省からレスキューチーム派遣の要請があった。筆者は、急速編成された国際消防

救助隊の責任者として「総括官」に任命され、六月二十二日から七月二日まで、イラン地震災害の救助活動にあたることとなった。

イラン地震災害派遣消防救助隊の活動内容については、今後、各方面で報告書が出されると思うが、本稿では、テヘランからの電話事情が悪いため、イランの日本大使館にお願した筆者から消防庁救急救助課長あての電報の写しを中心に、ドキュメント風にまとめてみることにした。

一、地震発生から国際消防救助隊 出發まで

一九九〇年六月二十一日(木) 五・五七
(現地時間 二十一日 〇・二七)頃

イラン北西部を震源とするM七・三(米地質研究所発表では七・七)の大地震発生。死傷者多数発生の模様。

六月二十一日 一九・五五

外務省より「イラン政府からの救助隊要請の可否の決定は、早くても明朝二十一日になる予定。」との連絡。

●筆者、政令改正が済んだための課内打ち上げ会中に国際消防救助隊総括官として派遣されることについての意向を聞かれる。心の準備ができず、ピンとこない。

二一・三〇

外務省より「今夜中にも、イラン政府から救助隊の要請がくる可能性が強い。」との連絡。

●筆者「まさか」と思いながらも急に酔いがさめ、自宅に出張準備依頼のTEL。

六月二十二日(金) 〇・二〇

自宅に救急救助課よりTEL。「イラン政府から救助隊派遣要請の可能性強い。消防庁からは6名派遣の見込み。」

二一・三三

イラン国政府から正式派遣要請。

二一・三〇頃

自宅に派遣決定のTEL。出張準備は翌朝として、とりあえず寝ようとするが、眠りが浅い。

三二・〇〇頃

出発は二十二日二二・三〇発JAL421便と決定とのTEL。

九・三〇

出張の支度をして出勤。新聞はのきのみ「死者二〇〇〇人超す」「ガレキの下に三〇〇遺体」「ダム決壊、洪水も」「震源周辺の村落壊滅」などと報道。人ごとではない。

一四・〇〇頃

IRT手帳のリストを見ながら、筆者個人としての出発準備は一応完了。向こうの様子がわからないので、他に何を持って行くと良いのか見当がつかない。

一六・〇〇頃

夕刊では「石、レンガの町、墓場に」「死者二万人超す」「がれき、立ち尽くす人々」などの大見出しが踊っている。あまり深く考えないことにする。

一七・〇〇

長官室において国際消防救助隊発隊式。総括官としての辞礼交付を受ける(図一)。

一七・三〇

自治大臣激励。がんばるぞ。

成田へ向け出発。

二〇・〇〇

成田JAL貴賓室で結団式。

団長 富永文朗 外務省技術協力課課



木村消防庁長官から総括官としての辞令交付を受けた(消防庁長官室にて)

長補佐
レスキューチーム

消防庁 六名(表二参照)

警察庁 六名

医療チーム 医師 二名

看護婦 四名

調整員等 四名

合計 二十三名

表二 イラン地震災害派遣

国際消防救助隊	総括官	小林 恭一
自治省消防庁	隊長	鎌倉 弘幸
東京消防庁	隊員	賛田 義昭
"	"	柴田 一昭
"	"	兼谷 正博
"	"	菊池 三十四
携行した主な救助用資機材		
(一) ファイバースコープ		
(二) 音響地中探知機		
(三) 熱画像直視装置		
(四) エアマイティ		
(五) レスキューツール		
(六) エアソー		

二二・三〇

JAL421便で成田出発。「本当に成田に戻れるだろうか。」と考えたのは、これまでの海外出張でも初めて。

二、テヘランからマンジュールまで

自治省消防庁救急救助課長あて
 (外務公電)
 国際消防救助隊 総括官 小林恭一
 (二十四日(日) 〇四・〇〇AM
 テヘランにて)

(一) 現在の状況

予定より約一時間遅れて、二十四日〇〇三〇過ぎテヘランに無事到着。所要時間三十一時間。特命全権大使斉藤邦彦氏の直々の空港出迎えに一同ビックリ。機材チェックに二時間かける。全て完備を確認。

ホテル着〇二・三〇AM。(ESTEGH LAL HOTEL)。
 斉藤大使を中心としてミーティング(〇二・四〇AM)〇三・三〇AM)。

(二) ミーティングの内容
 非公式発表で死者八万人超(後に五万人程度とわかる)。現地大混乱(テヘランは平常通り)。

レスキュー・チームは最も被害の激しいギーラーン州ロードパールに行つて欲しい

とのイラン政府及び赤十字の要望あり。明朝(二十四日)一〇・〇〇からの赤十字のハビビ空港本部長と大使館及びレスキューチームとの打ち合せて決める。早ければ午後にも現地入り出来る。

現地は水・食糧事情極めて悪く、宿舍もないため、テントで野営することになりそう。

道路寸断のため、軍の飛行機で現地に入る。

応援については、大使館とイラン政府の打ち合せて決める予定。

ロードパールとテヘランの間は電話が不通のため、東京との連絡はしばらく難しい。

救援物資輸送の飛行機に手紙を頼み、大使館経由で電報でやりとりすることになる見込み(余り当てにならないと思う)。

医療チームはテヘランに残つて、病院で重傷者を見て欲しいとのイラン側の要望。

総合チームとしての活動のやり易さと隊員の安全を考え、「出来れば一緒に」と要望する予定。

(三) イラン政府の対応と外国チームの様子
 当初、「援助して欲しいのはクレイン、ブルドーザー等の重機類で、医者やレスキュー

「チームは余り歓迎しない」との複数の報道があり心配したが、被害が予想より極めて大きい為か、「どの様な援助でも喜んで受け入れる」と二十三日(午後、イラン政府として公式に表明とのこと。

フランス・医療チーム四十五名活動開始。
レスキューチーム百八十名(犬十八匹)未だテヘランに滞在。現地入り出来ず。

イギリス・レスキューチーム(超音波探知機、赤外線カメラ等携行)十七名。現地入り出来ず。

ソ連・医療チーム活動開始。
その他の国については、続々到着中だが詳細はわからず。

レスキューチームは、各国とも現地入り出来ていない模様。

(四) 特記事項

消防、警察十二名の制服が目立つため、日本チームは飛行機内・空港でも注目的。日本人旅行者等からも「今回は対応が早かった。誇りに思う。」「頑張っ欲しい。」と言われる。外国人からも激励多数。

イラン航空では、日本チームのため二階席を専用にする破格の扱い。

ESTEGHALAL HOTELの費用も

イラン政府が出してくれる等、歓迎してくれている。

機材をトラックに積み込み中の○一・三
○A.M過ぎ、飛行機出迎へのイラン人多数の中から母親と幼女が花束を贈呈してくれた。チームを代表して外務省の富永団長が受けとる。一同大感激。

消防チームは、エルサルバドルの経験と、レスキューに関する精銳がそろっているため、レスキューチームの中心として活躍している。頼もしい限り。

日本チームの全体のチームワークも上々。
(五) 最後に

二十四日午後にも、交通・通信が途絶し水・食糧事情が厳しい現地(ルードバール)に入る可能性大。今後の我々の様子は大使館に聞いて欲しい。(了) 今

二十四日(日) 一〇・〇〇

イラン赤新月社において活動地域及び移動方法について打ち合わせ。なかなか決まらずイライラ。

隊員は大使館において救助資機材のチェック。

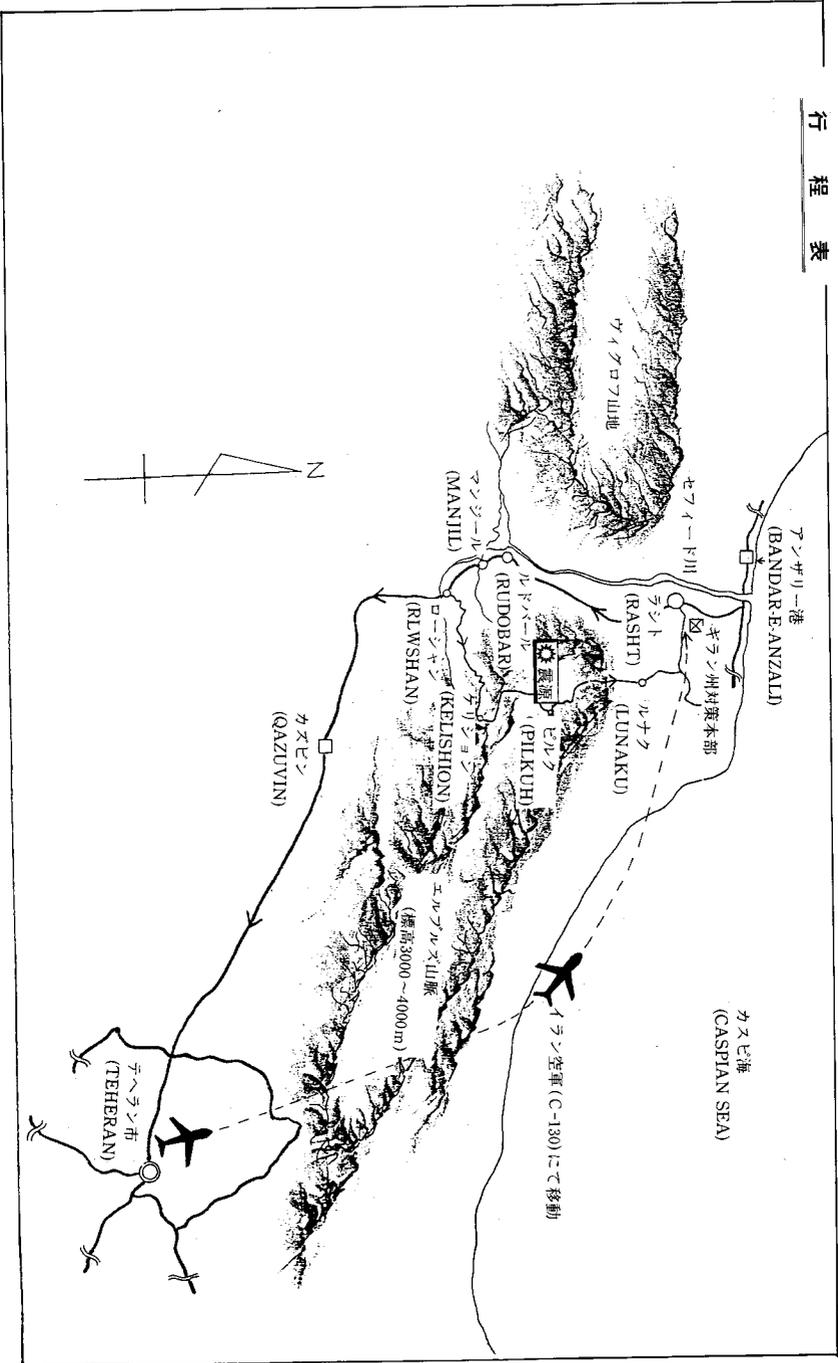
一八・五〇



マニラ市内は1~2割の建物が被害を受けていた
ラシュト

イラン空軍の軍用機でラシュトに向け出発。軍用機はアメリカ製のC130輸送機。二度と乗れない貴重な経験だが、軍施設内は写真禁止。残念。

行程表



一四・四〇

ラシュト空港着。空港外には負傷者収容のテント。空港内は消毒薬の臭い。けが人と避難民でこったがえす。「いよいよ現地」と緊張。

二一・三五

バンダル・アンザリー市のセフィド・ケナールホテル到着。

他国の救援チームと同宿（フランス、スイス、アゼルバイジャン）。

二十五日(月) 一〇・二五

ラシュト市現地対策本部に向けホテル出発。「今日こそ救助活動。」と張り切る。

二一・三五―一五・四〇

ラシュト市現地対策本部とギラン州厚生事務所において活動地域について打ち合わせ。なかなか決まらず、イライラを通り越して「インシシュ・アッラー（すべてアラアの神のおぼし召し）」と割り切る。

一五・四〇

救助チームはマンジールにおいて救助活動、医療チームはラシュト市内のケシュマツト病院において医療活動を行

うことに決定。医療チームと分かれるのは、安全面、衛生面ともに痛手。

一六・五〇

救助チーム、マンジールに向け出発。ラシュト市内も一―二割の建物は被害を受けている。

一九・〇〇

マンジール到着。市内の建物はほぼ全壊。

二〇・三〇

イラン軍の敷地内にベースキャンプ地決定。テント設置、野営。

三 マンジールでの活動

自治省消防庁救急救助課長あて

国際消防救助隊 総括官 小林恭一

(二十六日 〇一・〇〇 P M

マンジールにて)

(一) 現在の状況

マンジール(当初予定のルードバールから更に二〇kmほど入った町)の軍の敷地内でキャンプを張っている。キャンプ地はフ

ランス、イギリス等各国がそれぞれテントで野営している「国際救助隊村」とでもいうべき場所である。野戦トイレも出来ており、乾燥した草地で、伝染病の心配はなさそう。

マンジールは最も破壊のひどい町で、建物は軒並みつぶれている。ブルドーザーやパワーシャベル等の重機類を用いてイラン軍が跡かたづけをしており、この町で生存者のいそうな場所や建物はひととおり探索を終えた模様。

マンジールは山間の谷に出来た町で、更に山奥に小さな村が多数あるが、道路が崖崩れで寸断されており、全滅している村が相当数ある模様なるも不明。

現在、軍のヘリコプターで村々を調査中とのこと。

我々はイラン軍、フランス・チーム及び赤新月社(赤十字社のことをイスラム圏ではこう呼ぶ)等と調整中であるが、生存者探索に適当な村が見つかり次第連絡を受け、場合によってはヘリコプターで奥地に入る事になっている。現在、待機中。

(二) 応援要請について

イギリス隊のインマルサットによるアク

セスを通じて今朝連絡のおり、応援要請の必要性の有無を聞かれた。現地で鎌倉隊長とも協議したが、取りあえず救助チームとしては「現有勢力で対処したい」と考える。理由は以下のとおり。

(イ) 既に発災から一八時間を経過しており、未調査の村に行つたとしても、せいぜいあと数日しか生存可能性がないこと。

(ロ) 我々のケースでは、成田を発つてからテヘランまで三十一時間、更にマンジールまで四十四時間、計七十五時間を要している。テヘランとの道路が開通したため、もう少し短縮出来ると思うが、いずれにしろ各国隊の活動終了決定後に第二次隊が到着することとなる可能性が高いこと。

(ハ) 隊員に大きな疲労がないこと。

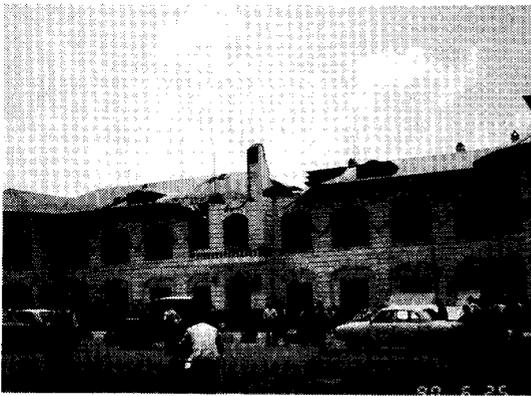
(ニ) テヘランからの兵たん線が長くなつており、車の確保、寝る場所や食糧や水の確保が非常に大変で、大使館やイラン政府にかなり負担をかけている。人数が増えるとその苦勞が倍加し、これまでと一転して我々に対する印象が悪くなる可能性があること。

(三) 各国の状況

我々のキャンプのまわりは各国救援隊の競演の場となつており、「救助オリンピック」という感じ。

フランス・チームは専用機でテヘラン入りしており、テヘランから陸路ロードバールまで強行突破した模様。

人数、装備とも抜群で、野営用の簡易ベッドまで持ち込んでいる。



各国の救助隊はマンジールの軍の敷地内にキャンプを張つた

このため国際隊の中でリーダーシップをとつており、山間の小村の探索を独自に行っている。

他のチームは日本と似たりよつたりの状況。

この中で我々のチームは人数、装備ともまずまずで、ようやく救助先進国の仲間入りをした感がある。

逆に、日本チームがこの中にいなければ、日本人はだれでも非常に肩身の狭い思いがすることと思う。これだけでも今回の派遣は意味があると思う。

(四) 最後に

もし、我々の活躍により生存者が見つかれば、これに過ぎるものはないので、現在は一日でも二日でも奥地の村に行つて活動出来るよう各方面に手配している。

今でも時々余震があり、中には強いものもある。救助作業中に半壊の建物が更に壊れる可能性もあるので、活動は慎重に行ふこととしている。

「ヘリコプターで奥地に入って帰れない」ということのないよう注意したい。(了)

四 ビルクでの活動



マンジール・キャンプ近くのアパートの崩壊現場

(一) 現在の状況

自治省消防庁救急救助課長あて
国際消防救助隊 総括官 小林恭一
(六月三十日(土) 〇一..〇〇AM)

現地での活動を終え、二十九日(金) 〇四〇PM、全員無事テヘラン着。エステグラル・ホテルに宿泊。
生存者の救出こそ出来なかったが、各国救助隊の中では最も奥地まで入って救助活動が出来たことを誇りに思う。

三十日中はテヘランで休養をとり、夕方から大使による慰労会に出席。7月1日(日)のイラン航空で帰国の予定。

(二) レスキューチームの活動について

①マンジールでの活動

- (イ) 六月二十五日(月) 夜八..〇〇過ぎに、各国救助チームのテント村に到着。野営。
- (ロ) 二十六日(火) 朝、「マンジールでの救出活動はほぼ終わりに近づいているが、マンジールの東側の山岳地帯に未調査の村が二百以上ある。現在ヘリコプターで調査中なので、生存者がいそうなら行ってもらうから、待機してほしい」とイラン側から要請あり。
- (ハ) 待機中に、マンジールとルードバールの被害状況調査。キャンプ近くのアパートの崩壊現場で救出活動。生存者発見出来ず。
- (ニ) 午後、「ヘリコプターで現地に入ってもらうかも知れないので、すぐ飛び立てるよう準備して待機して欲しい」とのイラン側の指示もあるも、結局要請なし。
- (ホ) 二十七日(水) 朝七..三〇からフランスチームと双方の機材を展示して交流中、イラン側より「生存者の可能性のある未復旧の村が山岳地帯の奥地でマンジールから九

十kmの地点にあるので、直ちに出發してほしい」旨の連絡あり。村名「ピル」標高二千五百M。

(イ) 一〇〇〇前、マンジール(標高一千五百M)出發。武装兵士に護衛され、険しい山岳地帯をバスとトラック二百で山越え。路肩が地震で地割れし、所々崩れている崖の山の道を攀げ、三千M級、四千M級の山々を越えて、三・一五、ピルクにたどり着く。殆ど「アフガン・ゲリラ」の世界。

② ピルクでの活動

(イ) 到着後直ちに現場調査。「生存者の可能性がある」という住宅の崩壊現場を三つ調査するが、生存可能性と二次災害の危険性から判断して、救出対象を一軒に特定。救出方法を定めた時点で日没。

いずれにしろ、建物のつぶれ方がひどいので、生存者のいる可能性は小さいと判断。軍の補給基地で野営。

(ロ) 二十八日(木) 朝六・三〇、キャンプを出發。前日の打合せ通り救出を開始。生存者がいることを考慮して、現地で調達したパワーシャベルとブルドーザーを慎重に用いながら救出活動。

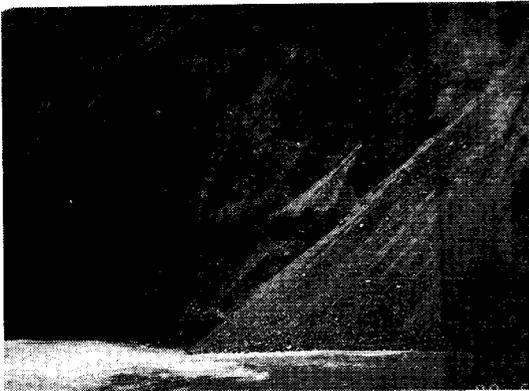
救助対象はシェリフ一家というパン屋。

父母と子供三人、祖母の六人家族。地震の際、母親と子供二人は逃げたが、残りの三人は逃げ遅れた。祖母の遺体は一部発見されている。父と子供一人が生き埋めとのこと。

活動するが、発熱がひどく、このまま放置すると再燃火災となる危険があるため、救出活動を危険排除活動に切り替える。

(ニ) 一七・三〇、高熱で遺体も白骨化してバラバラになっている可能性が高いため、遺体搜索を断念。全員黙とうして活動を終了。野営。

(三) 二十九日(金) の行動



マンジールの山奥には小さな村が多数あるが道路が崖崩れで寸断されていた



各国救助チームのテント村(マンジール)

ビルク出発七・三五A.M. マンジールに抜けるより近くて道も良いラシユトへ出る。

医療チームのいるラシユトのケシュマト病院に一一・四〇A.M.着。昼食後マンジールへ。

マンジールで撤収作業。六・〇〇P.M.マンジール発。テヘランのエステグラルホテル着一〇・四〇P.M。

ホテルで五日ぶりの入浴。生き返る。「ビールが飲みたい。」

(四) 各国隊の様子

日本以外で救援チームを送つて来たのは、把握している限りでは、英、仏、スイス、スペイン、キューバ、イタリア、ソ連、アゼルバイジャン、バクーの九隊(このうち、アゼルバイジャンとバクーは救急車十数台を含む医療班中心の大部隊で、陸路救援に來ている。「ソ連チームか」との問いに「ノー」と答えるところがおもしろい)。

二十九日(金)にマンジールに着いた時点では、マンジールに残っていたのはスペインの医療チームと、テヘランで足止めされていて遅れて着いたソ連の医療チームのみ。日本チームのテントはソ連チームに提供し

た。

救助チームで生存者の救出に成功したのは(把握する限りでは)皆無。

(五) 特記事項

ビルクで放水作業中の二十八日(木)五・〇〇P.M.ごろ、イラン外務省の情報文化局の担当官が広報やニューズウィークの女性カメラマンと共にヘリコプターで視察に來た。作業がちょうどクライマックスだったので、よい写真になつたと思う。

担当官から、改めて感謝の意を表される。

護衛の兵士(革命委員会所属)や運転手(聖戦建設隊所属)とは、奥地で共同生活を送つたため、すっかり意気投合。

彼らも日本チームと一緒に救出活動ができることを誇りに思っている様子。何くれとなく世話してくれた。

水や食糧は、結果的には豊富。ただし、カップラーメンとかんづめの食事はかりでうんざり。運転手たちが作ってくれたイラン料理がいろどりを添えた。感謝。

(六) 最後に

「今度はビールの飲める国に行きたい」とは、全員一致の感想。

フランクフルトでビールを飲むことを唯一の楽しみにして働いてきたのに、帰りは北京経由の直行便でしかもイラン航空とわかり、一同ガツクリ。(了)

五帰国

六月三十日(出) 七・〇〇

齊藤大使公邸で救助チームの慰労会。

大使館員と夫人たちの暖い慰労に感謝。

夫人方の心づくしの流しそうめんやてんぷらに感激。

七月一日(日) 一八・五〇

テヘラン発J.R.800便で帰国の途へ。

七月二日(月) 一一・五八

成田空港に到着。無事に帰れて何より。

一三・〇〇

国際緊急援助隊解団式。

一四・五〇

消防庁長官に帰国報告。ねぎらいの言葉にホッと緊張が解ける。

一五・〇〇

自治大臣に帰国報告。



地震時に発生した火災が土砂に閉じ込められ
発熱したため、冷却しながら活動（ビルク）

国際消防救助隊 イラン地震災害での現地活動



▲マンジール市内の建物はほぼ全壊の状態だった

6月21日に発生したイラン地震災害に出動した国際消防救助隊(6名)は、困難な現地活動を終えて7月2日に帰国した。(活動状況の詳細は本文記事参照)。同隊の懸命な活動には、イランの被災者からも感謝されたが、国際消防救助隊の今後の派遣活動に様々な教訓や課題も得た

〈本文記事参照〉

▼現地で調達したパワーシャベルとブルドーザを使っての救出活動(ピルクにて)

▲建物のつぶれ方がひどく生存者のいる可能性は小さいと判断(ピルクにて)



●イラン地震災害
国際消防救助隊派遣職員

自治省消防庁

総括官 小林 恭一

東京消防庁 小 林 恭一

隊長 小 林 恭一

隊員 小 林 恭一

隊員 小 林 恭一

兼 柴 賢 鎌
池 谷 田 倉
三 正 一 義
十 博 昭 昭
四 博 昭 幸

●バギオ市に移動した国際消防救助隊は、ハイアットテラスホテルを中心に、バギオ大学、ロイヤル・イン、セントポイント教会、ネバタホテル等において、余震が続く中、アメリカ、イギリスのレスキューチームと共に、エアジャッキー、レスキューツール等救助資機材で瓦礫を排除し、ファイバースコープで生存者の発見に努めるなどの救助活動を行った



写真：サンテレフォト



Rescuers join search for survivors, using sophisticated equipment



▲7月18日にフィリピン地震災害に派遣された国際緊急援助隊は、7月26日帰国。国際消防救助隊11名は、自治省消防庁において消防庁長官への帰国報告を行った